

2014（平成26）年度

三重県教育委員会委託「実践研究事業」

豊かな人権教育の創造をめざして

～子どもの「生活課題」から出発した取組を～

教職員実践事例資料

公益社団法人三重県人権教育研究協議会

目次

I 作成にあたって	2
II 学びのナビゲーション (若い世代へのメッセージ)	3
III 実践事例を通して	
事例① 【松阪市立中原小学校の実践】	4
事例② 【亀山市立野登小学校の実践】	5
事例③ 【志摩市立磯部中学校の実践】	6
事例④ 【津市立美里中学校の実践】	7
IV 教職員のスキルを高める5つのステップ	8

Ⅰ 作成にあたって

～明日からの豊かな実践創造に向けて～

2014（平成 26）年 8 月、「子供の貧困対策に関する大綱」が閣議決定されました。大綱では、「子どもの将来が生まれ育った環境に左右されず、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図る対策が極めて重要」とし、国を挙げて教育や生活の支援などに取り組むこととしています。

このような考え方や取組内容は、1950 年代に同和教育が始められて以来、長きにわたり大切にされてきた人権教育の重要なテーマの一つでもあります。同時に、これらの取組を進めるにあたっては、目の前の子どもの生活実態を把握し、そこから教育課題を明らかにすることが不可欠とされてきました。

三重県人権教育基本方針には、「人権感覚あふれる学校づくり」を進めるうえで、「子どもや家庭・地域社会の実態を的確かつ総合的にとらえ、差別を解消するうえでの課題を明らかにすること」が忘れてはならない観点の一つとして明記されています。

貧困の問題をはじめ、子どもを取り巻く状況が厳しさを増している今、子どもの生活実態をとらえたうえで取組を進めることがあらためて求められているといえます。

本冊子では、教職員が子どもの「生活課題」を踏まえ、そこを起点に自尊感情の向上や互いを認め合う仲間づくりにつなげていった取組事例を取り上げ、実践者の学びを具体的にまとめました。

子どもの自己実現を可能にする人権教育を進めていくには、私たち教職員が日々の取組を振り返り、悩みや葛藤、子どもたちの成長の様子をまとめ、互いに学び合いながら実践力を高める必要があります。

人権問題の解決を自分の課題としてとらえ、課題克服のために状況を変えようとする具体的な行動に結びつく教育の充実を図るため、人権学習指導資料等と併せて、今後の実践創造に向けて、本資料をご活用いただければ幸いです。

II 学びのナビゲーション（若い世代へのメッセージ）

～子どもの「生活課題」から出発する取組を～



人権教育ガイドラインでも、「子どもをとりまく実態から教育課題をとらえること」と「一人ひとりが認められる仲間づくりを進めること」の重要性が述べられています。

～「生活課題」とは？～

「問題行動」「学力不振」「不登校」など、様々な姿で子どもたちの課題は現れてきます。悩みや不安を隠して明るく振る舞おうとする姿や、周りの目を気にしながら自分のくらしに自信を持たずにいる姿、将来に対して展望をもちきれない子どもたちの姿が見られます。子どもたちの自己実現を阻んでいるものが何なのか、表層のみでなく、その背景にある「生きづらさ」「悩み」「不安」などをつかむことが「生活課題」を明らかにすることです。また、「生きづらさ」などの要因の一つには、社会に存在する様々な人権問題があると考えられます。「生活課題」は、このような子どもたちが抱える「生きづらさ」の中に見え隠れするものです。

～「生活課題」をとらえるとは？～

「生活課題」をとらえるためには、家庭訪問や子どもとの話し込みをとおして、「生い立ち」や「地域の実態」、「保護者のくらしや思い」などをつかむことが重要です。

また、子どもたちが書いた日記や作文などからも「生活課題」が見えてきます。そこに目を向けることで、子どもが背負わされている問題に気づき、その解決を図るための取組の方向性が見えてきます。

～「生活課題」を出し合い、受け止め合う仲間づくりを～

互いの「得意なこと」や「がんばっていること」を認め合える子どもたちの関係性をつくっていくことは大切です。しかし、一方で、「得意なこと」や「がんばっていること」がなければ認められない集団づくりに終始してしまわないよう注意する必要があります。子どもたちが「しんどいこと」、「悩み」、「つらさ」をも含めたありのままの自分を開くことができる、安心感のある集団づくりを進めていかなければなりません。

一人ひとりの存在をありのままに受け止め、互いを高め合う関係性の中で、子ども自身は「生まれてきてよかった」、「自分には価値がある」と感じ、自尊感情を高め、他者とつながる力や自立する力を育てていきます。

III 実践事例を通して

※ 県内および全国における人権教育の実践研究・協議の様子を基に構成しました。報告内容等は、原文を尊重して編集しています。

事例①

ぼくのお母さんは、かっこいいです

松阪市立中原小学校のレポートより

【実践の概要】

3年生のAは、母親の出身地であるフィリピンに興味を示さず、自分に自信の持てない子どもだった。担任は家庭訪問を繰り返す中で、Aが母親の仕事の内容や仕事を進めるうえでの苦勞、自分への思いなどを知っていく機会をつくった。

そして、総合的な学習の時間の「お母さんは言葉で人と人をつなぐ仕事です」というAの言葉をきっかけに、他の子どもも自分のことや家族のことを語り合い、仲間としてのつながりを深めていった実践。

実践者の振り返り

親と子、そして教職員が互いに向き合うことで、見えてくるものがたくさんあった。子どもが親の生き方を知ることとおして自分自身のルーツを知り、親の家族を大切に思う心が子どもの自信や誇りになっていくことを感じた。

教職員は、子どもたちの「いいところ」ばかりに目を向けがちである。しかし、まず担任が子どものありのままの姿を受けとめ、子ども同士をくらしの事実でつないでいくことが大切である。そのようにしてできた人と人とのつながりは、子どもたちの生きる力となっていく。

学びの視点

家庭訪問で親と話し込むことによって、その子の生き立ちや生活背景、子どもの将来への願いなどを知ることができる。それらを意図的にクラスで開いていくことにより、共感し認め合える子どもたちの関係がつけられる。

※報告の原文は、第48回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例②

「ぼくは野登にいる」

亀山市立野登小学校のレポートより

【実践の概要】

入学を前にして、大きな家庭環境の変化のあったA。学校生活では楽しそうな表情を見せるものの、担任やクラスの子どもたちに対して自分から家族のことを話すことはなく、そのことがかえって母親への思いの強さを感じさせた。

2学期に入り、Aの学校や家庭での行動に落ち着きが見られなくなってきたことから、担任は保護者との連携をさらに深め、専門機関からの助言を受け、効果的な校内体制を整えていった。学校全体として、Aの日々の生活から課題を把握し、育ちを支えていった実践。

実践者の振り返り

子どもの育ちを支えていくためには、子どもが表面的に見せる姿だけではなく、その言動の裏にあるものを、くらしも含めたいろいろな角度から探っていくことが大切だと感じた。その事実をもとに、子どものいちばんの理解者である保護者と情報を共有しながら、専門機関とも連携した学習面や生活面への手立てを考え、子どもを中心に据えた取組を進めていくことが重要だと思った。

学びの視点

気になる子どもの言動の背景にある「生活課題」を解決するために、保護者のみならず、専門機関との連携も模索していくことが必要である。

※報告の原文は、第48回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例③

Aを中心に据えた学級集団づくり

志摩市立磯部中学校のレポートより

【実践の概要】

入学当初から落ち着きがなく、学習に対して前向きに取り組むことができなかったA。友だちに対する厳しい言葉や不器用な接し方から、学級の仲間からもなかなか受け入れられない状態が続いていた。

「部落差別とどう向き合ってきたか」、「Aへの将来に対して望むこと」などについて母親の思いを知り、仲間の「進路・生き方」に対する考えに共感することをとおして、Aが自分自身の課題に向き合えるのではないかと考えた。

自分の課題を見つめることをとおして、将来の自分のことを真剣に考えるきっかけにしてほしいと取り組んだ実践。

実践者の振り返り

生徒たちの姿が劇的に変容するような特効薬はない。生徒との日常的な関わりや地道な家庭訪問をおとして、子どもの背負わされている課題を把握することが大切であり、その解決のための取組を進めていくことによって、子どもたちや保護者とのさらなるつながりが生まれていくことがわかった。そのようにしてできたつながりがあって初めて、子どもたちの生き方にまで迫る取組になっていくのだと思う。

学びの視点

家庭訪問を繰り返すことによって保護者との関係が深まり、ようやく部落問題に対する思いや子どもへの願いを聞き取ることができる。

※報告の原文は、第48回三重県人権・同和教育研究大会報告書集ならびに第66回全国人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例④

Aのマイクは語り合いのバトン

津市立美里中学校のレポートより

【実践の概要】

聴覚障がいのあるA、特別支援学級籍のB、Cら32人の学年集団にとって、共に学ぶことは自然なことだった。「学校を卒業してからの社会でも、共に生きることがあたりまえ」という意識とそれを発信する力を育てたいと考えて、人権劇や人権トークを中心に2年間取り組んだ。

進路選択にあたり、Aは高校か聾学校高等部かで悩み、最終的に聾学校高等部への進学を自ら決めた。そして、Aの願いから「自分がめざす道」について仲間と語り合う機会をもった。聴覚障がいのあるAの補聴用マイクを、バトンのように引きつぎながら語り合うようになった32人は、互いの思いや願いを真剣に受けとめ合っていた。

実践者の振り返り

「誰もが持っている『働きたい』『学びたい』という願いが叶えられる社会」をテーマにした人権劇づくりをとおして、クラスの中で語り合うスタイルが定着していった。聾学校高等部へ進学する決意を語ったAに伝えるときも、「心の中に閉じ込めていた思い」や「今こそ伝えておきたい思い」を卒業式前日にみんなで語り合うときも、いつもAのマイクがバトンとしてパスされ、自分たちの思いを確かめ合っていた。語り合うことの力と、語り合える仲間の力を実感した2年間だった。

学びの視点

一人ひとりが抱える悩みや課題をクラスの中で共有し、考え合うことから、社会問題としての人権問題を学ぶことができる。

※報告の原文は、第48回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

IV 教職員のスキルを高める5つのステップ

実践をレポートにすることで、成果や課題を検証することができます。

ステップ1 気になる子のことを書き出してみよう。



気になる子がどんな状況にいるのか

学校や家庭・地域の中で、その子はどんな状況にいるのかを書こう。
そして、「なぜ、その子が気になるのか」を考えよう。

ステップ2 概念や観念でなく、具体的に書き出してみよう。



具体的な子どもとのやりとり

教職員の推測や思いや願いだけを並べるのではなく、具体的な子どもの姿、言葉、作文（保護者の姿、言葉）などを中心にして書こう。



気になる子とまわりの子たちとのつながり

子ども同士の話の内容ややりとりを中心に、具体的に書こう。

ステップ3 取組でのつまずきや躍動、葛藤、感動を書き出そう。



自分のやってきたこと、やっていること

取組だけでなく、考えたことや悩んだこと、心配したことなどを整理しながら書こう。

ステップ4 取組後の気になる子の変化を書き出してみよう。



気になる子がどんな状況にいるのか

気になる子とまわりの子たちとのつながりを、子ども同士のやりとりを中心に書こう。

ステップ5 次の取組に踏み出すヒントを見つけよう。



書き上げたレポートを次の視点で再点検してみよう

- ① 気になる子が自分らしく生きていくことを阻む課題が見えているか。
- ② 気になる子や保護者の生活状況が見えているか。
- ③ まわりにいる子たちやおとなの思いをつかめているか。
- ④ 気になる子の実態から教育の課題を見つけることができているか。

解説

子どもたちがどんなことに苦しみ、何に悩んでいるかを子どもの姿から明らかにしていくことが大事になってきます。子どもたちの抱えている思いが一人ひとり違うように、その背景にあるものもそれぞれ違います。そこに何があるのかをつかむために、学校外での子どもたちの生活を知る必要もあります。

また、具体的に書き出すためには、一人ひとりの子どもとじっくり対話していくことが大切です。また、保護者との対話もなくてはならないものです。

まとめた実践について多くの人に意見を求め、協議していくことにより、新たな視点や見落としていた事実に気づいたり、今悩んでいることが解決したりすることも少なくないはずです。

2014（平成26）年度三重県教育委員会委託「実践研究事業」

豊かな人権教育の創造をめざして

教職員実践事例資料

2015（平成27）年3月

公益社団法人三重県人権教育研究協議会

〒514-0113 三重県津市一身田大古曾693-1

三重県人権センター内

電話：059-233-5530

本出版物に関する著作権は委託元である三重県教育委員会が有します。
三重県内の公立小・中学校及び県立学校の教職員等が公務で使用する場合を除く
ほか、「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、
三重県教育委員会の許可なく無断で複製・転用することはできません。